

八百屋 夢屋

の二十二年



▲うさみ のぶこさん
1952年 室蘭市生まれ
北海道大学卒業後北海道新聞に入社

北海道新聞 文化部 次長

宇佐美 暢子

札幌の国道36号線から少し北に入った豊平の交差点のそばに、小さな店がある。板張りの入り口の上には手書きの文字で「八百屋夢屋」。できるだけ農薬を使わない野菜や果物、無添加の食べ物を扱う専門店だ。この夢屋が七月で開店二十二年を迎えた。今では道内で同様な店が増えているが、これだけ長い歴史があり、生産者と消費者をしっかりとつないでいるところはほかにないのではないだろうか。

ウエーブがかつたもじゃもじゃ頭がトレードマークのプーさんと大堀誠さんが店の代表者。一九七五年、長男の今日君が生まれ、一条市場の魚屋さんで働きながら共同保育所にかかわっていた大堀さんは、子供たちの食べ物に関心を持つ。友人を通じて、有機無農薬栽培に取り組み一人の生産者Mさんと出会った。それが夢屋を開くきっかけになった。

東京のサラリーマン生活に区切りをつけ、妻の実家がある当別で農業を始めたMさんが作ったインジンの味に驚いた。「こんなに違

うのか。今まで食べていた野菜はなんだっただろう」。土づくりにかけるMさんの情熱にも感心した。

「生産者の人々が、食べる人の食卓や健康を思い浮かべながら食べ物を作ってくれるから、私達はいつも生命と身体を育てている。私達ちもできたものをしっかりと食べ続けられ、生産者の人々の生活も守られ、畑もどんどんよくなっていく、おいしいものも帰って来るし、緑も自然環境も維持できる。このような支え合える関係が自然で、なによりも一番いい」。そう思うようになった。今もこの考えは変わらない。

最初はMさんの畑で採れたものを車で運び、保育所の親たちなどに売るだけだったが、生産者、消費者ともに少しずつ増えていった。四年目、美園に初めての店を持った。その後、豊平に移ったが手狭になり、みそやしうゆの倉庫だった建物を借りて六年前、現在の店を作った。八四年には有限会社にした。

近くで夫婦二人暮らしというお



▲八百屋 夢屋



▲代表者の大堀さん

ばあさんが店にやってきた。トマト一個、卵五個、小松菜一束、小揚げ一枚を選ぶ。トマトと卵は計りに載せられた。必要な分だけ買ってもらったための計り売りだ。「きょうは豆腐ないの」「ごめん。さつき売り切れちゃった。あした取っておきましょうか」「そろそろ梅漬けを作る季節だね」「予約注文取り始めてますよ。六月はいい天気が続いたから仁木の梅は今のところ順調。この分だと青梅は七月二十日過ぎには配達できるかな」「楽しみだね」。ゆったりとした時間が流れる。

店の従業員はパート一人を含む七人。販売は店での小売りのほか、曜日と場所と時間を決めて四台の車でコースを回る移動販売、留守でも指定場所に置く配達の本三柱を主力にしている。札幌市内はもちろん、小樽、石狩、北広島、恵庭、当別、江別をカバーする。配達固定客は約五百戸。総売り上げは年間、約一億五千万円に上る。生産者と消費者を結ぶさまざまなイベントも行っている。五月は田植え祭。今年は約五十人で富良野の農事組合法人「ビーバーファーム」に出掛けた。毎月発行している夢屋ニュース六月号には参加者の感想記がいっぱい。「泥まみれの楽しい一日。秋にはちよつびり曲がって並んでいる稲を収穫しに来よう」「北海道にはこんなに水田がたくさんあったと再認識した」。イチゴ狩り、サクランボ狩りも好評だ。秋には年一回のたべもの市を開き、生産者の話を聞きながら、もちつきや料理を楽しむ。料理講習会も随時開き、食べ物を通して暮らしを考えなおすきっかけにしたり、自慢のレシピ交



▲今年5月に富良野で開いた田植え祭には子供を含め約50人が参加した

換も。しかし、二十一年の間に、農業を取り巻く状況は随分変わり、それとともに夢屋も悩みの時代を迎えている。

道有機農業研究会によると、現在、道内の農家の一割に当たる約一万戸が有機農業を手掛けているという。農産物に安全性を求める消費者の声は高まるばかり。スーパーに有機野菜コーナーがあるのは珍しくなくなった。かつて少数派だった有機農業はすっかり市民権を得た格好だ。大企業が魅力的な商売として有機農業に関心を持ち、積極的に経営に位置付けるようになった。そんな中で、夢屋のような小さな八百屋さんはなかなか大変だ。

九・二ハクタールの畑を持ち、夢屋にジャガイモなどを出荷している富良野の阪井永典さんは農家の三代目。農業の将来に不安を持ち、東京で八百屋を経験したのでが有機農業に取り組みきっかけになった。夢屋扱いの農産物の量はわずかなため現在、農協出荷が約半分、夢屋以外の流通ルートにも載せている。「本来、生産者自身が

値段をつけて、消費者が自由に選べるのが一番いい」と考えている。

農産物自由化が進む中で有機農産物の流通グループで「脱国産」を打ち出すところが登場したり、有機農産物の基準を認定する団体を自主的に作るという動きも出てきた。有機農業全体がひとつの転換期を迎えているとも見える。実は、夢屋に出荷している農家が集まって毎年の作付を決める会議から発展した農家の集まりが、昨年、一時解散した。将来の有機農業をどう育て、農産物をどう流通させて行くかをめぐる意見の違いがきっかけになった。

大滝村でニンジンなどを作る生産者として夢屋と二十年以上のかかわりを持つている山城一郎さんは、今後の夢屋について「消費者と生産者のつながりを大事にする姿勢を守り続けてほしい」とエールを送る。二十二年間、夢屋から買っ物を続けている消費者たちも「安心感とあったかさが夢屋の魅力」という。これに対し大堀さんは「スタートしたときの考え方

は変えずに、生産者と消費者が支え合えるような関係を作っていきたい」と話している。

▼店内の大堀さん



▼八百屋 夢屋の店内

